

市民科学ニュースレター

言語地理学からみた諏訪と市民科学

1 はじめに

信州そして諏訪は、さまざまな事象の東西の境界にあたること、北信・中信・東信・南信と呼ばれるような明瞭な地域区分を持つこと、山に囲まれた盆地が多く存在すること、そして、小さく堅固なコミュニティが社会を支えていることといった、地理的条件を持ち、言語地理学にとっても、魅力に富んだ地域です。実際、全国方言の東西対立や多様な方言が、そこにはあります。

そのような諏訪地方では、言語地理学においても市民科学による実践が早くから行われていました。

2 方言と言語地理学

方言とは、場所によることばの違いです。そのような場所による違いに注目して、ことばと場所の結びつきを分析するのが言語地理学です。

方言の分布は、対象ごとに個性的で、多様性に満ちています。したがって、それらをできるだけ正確に捉えることが求められます。

そのような場所によることばの違いを視覚的に表現するのが、言語地図や方言地図と呼ばれる地図です。後述するように日本では20世紀初頭から作成されており、全国だけではなく各地を対象とした地図も多く、地図集（アトラス）で約400冊、地図（マップ）では28,000枚以上刊行されてきました。この数は、世界的に誇るべき数字です。

言語地図・方言地図は、言語地理学にとって、欠かすことのできない研究資料であり、かつ、研究ツールです。

3 諏訪地方と言語地理学

言語地理学に適地であることから、長野県を対象と

した言語地図集は20冊にのぼり、約900枚の言語地図が作成されています。

諏訪清陵高等学校の教員であった土川正男氏による『言語地理学—日本語の歴史地理学的研究』（1948年、あしかび書房）と茅野高等学校の教員であった牛山初男氏による『東西方言の境界』（1969年、信教印刷株式会社）は、冒頭にも記した市民科学による実践の成果です。

諏訪地方を対象とした言語地図集としては、信州大学の馬瀬良雄氏による『上伊那の方言』（1980年、上伊那誌刊行会）があります。1970年代に行われた上伊那地方から諏訪地方を対象とした調査の結果を表す言語地図集です。

私、大西は、信州大学の沢木幹栄研究室と共同で『上伊那の方言』の分布を2010年代初頭に追跡調査し、その結果を『長野県伊那諏訪地方言語地図』として、2016年に公表しました。

4 東西対立と信州・諏訪

方言の分布は多様ですが、その中にはいくつかの類型のあることが知られています。その代表が、日本全体が東西に分かれる、東西対立です。

動詞の否定（打消）は、「書かない」「見ない」のように否定辞のナイで表しますが、これは東日本の形であり、西日本では、「書カン」「見ン」のようにンが用いられます。

その分布を図1に示しました。この図が示すように、東日本のナイと西日本のンの境界は長野県の近くにあることがわかります。

東西対立は、動詞否定辞以外でも確認され、境界の位置はそれぞれ異なりますが、いずれの場合も境界線が諏訪地方の中を通ること、つまり、諏訪の中が東西に分断されることは、ほとんどありません。

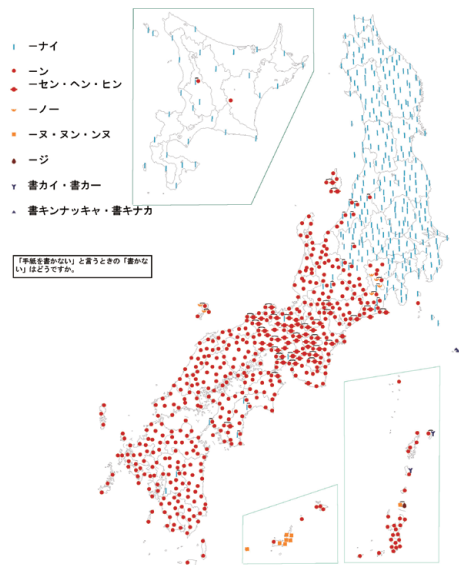


図1: 動詞否定辞の分布 (国立国語研究所編『方言文法全国地図』第2集80図のデータをもとにする。)

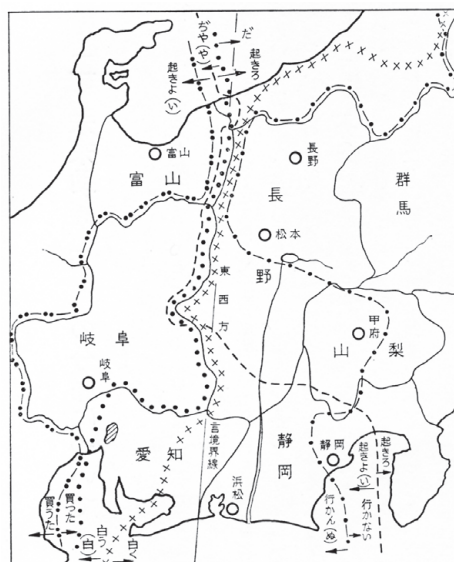


図2: 牛山初男(1969)『東西方言の境界』(13頁)に掲載された東西境界の総合図

5 東西境界線と牛山初男

東と西でことばに違いがあるということは、かなり古く（奈良時代）から気付かれていました。しかし、境界の位置が明確に捉えられるようになるのは明治時代になってからです。

当時の文部省の中に設置された国語調査委員会が全国調査をもとに1906年に公刊した『口語法分布図』により、初めて地図の形でそれが示されるようになったのです。この地図と前年に出た『音韻分布図』が日本で最初の言語地図集です。

国語調査委員会が全国調査を行った背景には、義務教育で用いることばの問題がありました。20世紀の初頭はまだ標準語が確立しておらず、教育現場で用いることばをどのようにするかを検討するために実施されたのです。

その調査から半世紀近くを経て、境界線の位置に動きがないのかということに関心を持つ人が現れました。それが牛山初男氏です。義務教育が実施されて相当な期間が経つのだから、標準語の基盤となった東日本のことばの領域が広がり、境界線が西に動くのではないかと考えたのです。そして、それをテーマに自身で調査して、地図を描き、論文にしました。それが1953年に国語学会（現在の日本語学会）の学会機関誌『国語学』12号に掲載された「語法上より見たる東西方言の境界線について」という有名な論文です。

この論文の結論は意外なものでした。多くの人の思惑とは異なり、境界線は動かない、という結果が示されたからです。

牛山氏は、その後も研究を続け、多くの論文を執筆します。そして、それらを1冊にまとめたのが、先にもあげた『東西方言の境界』です。図2には、そこに掲載された境界線の分布図を示しました。

この図でもわかるように、東西対立の境界の位置は対象ごとに異なり、中部地方の広くに渡ります。牛山氏は、各地の学校に協力を求める通信調査（郵便で回答してもらう調査方法）と独自のフィールドワークを併用して、データを求めたようです。すべて歩いて回ったわけではないにしても、個人でこれだけの広い範囲を調査した労力には頭が下がります。

牛山氏が見いだした東西対立の不動については、その後も確認されています。国立国語研究所は2010年代前半に全国調査を実施しました。その調査はFPJDと呼ばれ、調査結果は、2016年に『新日本言語地図』として公表されています。この調査は、1960年代の分布を示す『日本言語地図』や図1にも示した、1980年代の『方言文法全国地図』（GAJ）からの変化を捉えることをひとつの目的とするものでした。

図3は、動詞否定辞について、GAJ（1980年代）とFPJD（2010年代）の比較を示しています。GAJの方は図1が扱う分布と同じです。上のナイの分布でも、下のンの分布でも、分布はほとんど変化していな

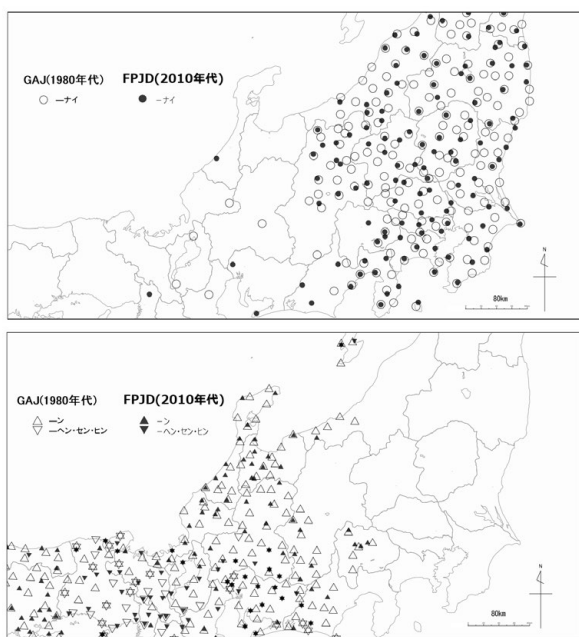


図3: 動詞否定辞の1980年代と2010年代の分布の比較(大西2016より)

いことがわかります。牛山氏が1953年に示した事実が現在も生きていることになります。

ところで、牛山氏が対象とした東西対立は、動詞の否定形（動詞否定辞）、命令形、ワ行五段動詞の音便形、形容詞の音便形、断定辞のように、すべて、文法（語法）に関係するものでした。図3が扱うのも動詞否定辞ですから、文法です。

牛山氏が発見し、図3のように、その後も検証されている東西対立などの分布不変について、いずれも対象が文法に関するものであることに注意する必要があります。その上で、意味するところを考察することが求められます。

6 諏訪の方言分布

すでに述べたように東西対立の境界が諏訪地方の中を通ることはありません。ですから、諏訪地方の中の方言分布に東西対立は、直接関与しないことになります。したがって、それ以外の対象をもとに諏訪の分布を考えることになります。

諏訪地方の中の分布を見るためには狭い地域（狭域）を対象とした詳細な言語地図が必要になります。諏訪を扱う、そのような詳細な狭域言語地図としては、先にあげた『上伊那の方言』とその追跡調査である『長野県伊那諏訪地方言語地図』があります。

これらをもとに諏訪地方の方言分布を見ると、諏訪

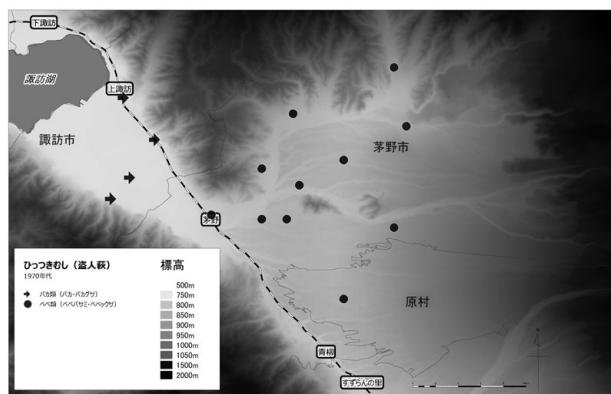


図4: 諏訪地方における1970年代の「ひっつきむし」の方言（『上伊那の方言』をもとに再描画）

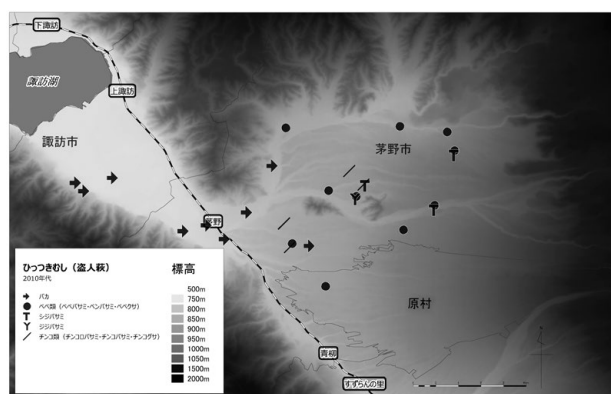


図5: 諏訪地方における2010年代の「ひっつきむし」の方言（『長野県伊那諏訪地方言語地図』をもとに再描画）

盆地の中が、南に突き出した永明寺山を目安にして、ハケ岳側と諏訪湖側に分かれる、分布類型の存在に気付きます。諏訪では、ハケ岳山麓は「やまうら」と呼ばれますから、「やまうら」と「やまうら以外」と言ってもよいでしょう。

典型的な事例が見られる「ひっつきむし」の方言の分布を見てみましょう。ここで「ひっつきむし」というのは、衣類などに付着する、いろいろな植物の種子の総称です。植物の種子は自分では動けませんから、風で飛ばされる、鳥に食べられるなど、さまざまな手段を使って、生息域を広げようとします。衣類や動物の毛に付着するというのもひとつの方法です。秋から冬にかけて、道ばたや野原、藪などでズボンの裾や服の袖に小さな種がたくさんひっついてなかなかとれないという経験はないでしょうか。あれが、ひっつきむしです。ヌスビトハギ、センダングサ、タウコギ、オナモミなどいろんな植物がありますが、ここではそれらを細かく区別せず、ひっくるめて扱うことにします。

図4は『上伊那の方言』で扱われた1970年代の「ひっつきむし」の方言分布です。ハケ岳山麓のやま

うらではベババサミなどベベ類が使われていますが、諏訪湖側ではバカなどバカ類が使われています。やまうらとやまうら以外という形で、諏訪盆地が分かれていることがわかります。

図5は2010年代の「ひつつきむし」の方言分布です。バカ類が諏訪湖側からやまうらに少し進出しています。一方、やまうらの中でシジバサミやジジバサミといった1970年代にはなかった新しい語形が生まれていることもわかります。

このように詳細な狭域言語地図を見ることで、特に語彙（単語）の分布をもとにした、地域の中の区分を捉えることが可能になります。

7 高地・低地諏訪方言と土川正男

諏訪地方の方言分布がハヶ岳側と諏訪湖側に二分されることについては、先にあげた土川正男氏の『言語地理学—日本語の歴史地理学的研究』に早くから指摘がありました。図6のように、土川氏は、キサインジイ（原文はキサンヂイ、意味は、立派な、みごとな、出来のいい）という語の分布をもとにして、「高低両諏訪方言」という用語で説明しています。この用語は、ドイツ語における高地ドイツ語と低地ドイツ語の違いになぞらえたのではないかと推測されます。土川氏は、Bloomfieldの*Language*も引用して説明されており、

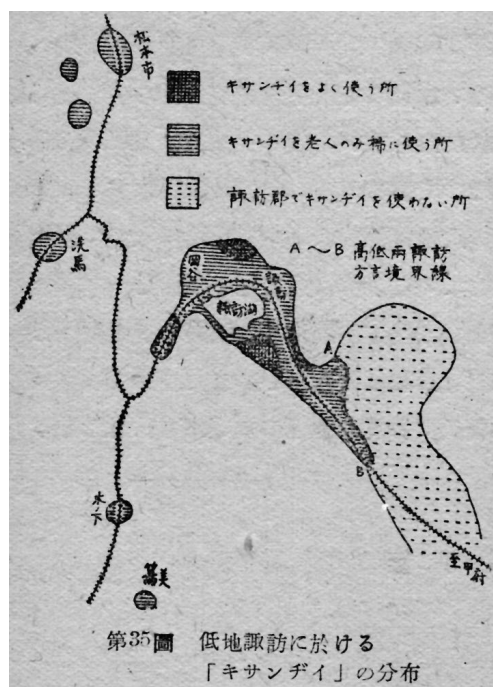


図6: 土川正男(1948)『言語地理学』に掲載(196頁)の高低両諏訪方言境界線。キサンヂイは「立派な、みごとな。出来のいい」を表すとされる。

和訳が出版されるよりも前ですから、原著で読んでいたはず。国立国語研究所編『日本言語地図』第1集の解説「沿革と経過」における「日本の言語地理学の歴史」では、土川氏の同書を「戦後のあけぼの」として紹介しています。

8 むすび

言語地理学という研究分野を紹介しながら、信州・諏訪地方の方言分布の特色と、それを早くから研究実践してきた、牛山初男氏と土川正男氏による市民科学について概説しました。彼らの方言に対する姿勢は、研究対象として客観的に方言を扱うという点で、きわめて「科学」的です。それを通して、東西対立不変や高低諏訪方言区分の発見などが導き出されています。これらの発見も市民科学が先んじて求めたものでした。それらが意味するところの解明はわれわれに委ねられています。

牛山氏と土川氏は、ともに旧制諏訪中学校の出身です。在校期間は、信州の市民科学を先導した三澤勝衛氏の在任期間と重なっています。お二人と三澤との関係や考古学や地理学も含めた他分野の市民科学との相互のつながりなどは、十分に明らかにできていません。今後は、この点をさらに追究していきたいと思います。

大西拓一郎（国立国語研究所）

参考文献

- 牛山初男(1953)「語法上より見たる東西方言の境界線について」『国語学』12、59-63頁
- 牛山初男(1969)『東西方言の境界』(信教印刷株式会社)
- 大西拓一郎(2016)『長野県伊那諏訪地方言語地図』
- 大西拓一郎(2016)「方言の東西」『HUMAN』8、41-50頁
- 大西拓一郎(2019)「『ひつつき虫』方言の変化を探る」『BIOSTORY』31、72-73頁
- 大西拓一郎編(2016)『新日本言語地図』(朝倉書店)
- 国立国語研究所(1966-1974)『日本言語地図』全6巻(大蔵省印刷局)
- 国立国語研究所(1989-2006)『方言文法全国地図』全6巻(大蔵省印刷局・財務省印刷局・国立印刷局)
- 土川正男(1948)『言語地理学—日本語の歴史地理学的研究』(あしかび書房)
- 馬瀬良雄(1980)『上伊那の方言』(上伊那誌刊行会)

諏訪盆地の地形と文化

1 はじめに

諏訪盆地は、諏訪湖とそこに流入する多数の河川の流域で構成されています。諏訪湖の近くには平坦地が広がっていますが、河川の上流域には急峻な山地が見られ、諏訪盆地は山に囲まれた空間になっています。旧制諏訪中学の時代に作詞され、戦後の諏訪清陵高校でも「清陵祭の歌」として歌われた「境をめぐる」という曲には、「境をめぐる山々」「籠もるやここに諏訪の国」という歌詞があります。これは、山が周囲を取り巻く閉鎖性が高い地形を描写しています。このような諏訪盆地の地形がどのように形成され、それが人々にどのような影響を与えてきたかを考察します。

2 プルアパート盆地としての諏訪盆地

山地と低地が接する盆地は、長期にわたる断層の活動で形成されることが多く、特に日本を含む地殻変動が活発な地域では、一般的な盆地の成因になっています。断層にはいくつかの種類があります。地殻が伸張する場で生じる正断層と、地殻が圧縮される場で生じる逆断層は、地形の高低差をもたらします。広域の地殻が伸張したり圧縮されたりすると、複数の正断層や逆断層が並行に配列し、山地と盆地が形成されます（図1）。日本の大半の場所では、プレートの沈み込みによって地殻が圧縮されているため、逆断層で形成された山地と盆地が多く見られます。

断層には横ずれ断層と呼ばれるものもあります。一般に横ずれ断層では、断層の両側の地殻が水平かつ反

対方向に動き、地殻の高低差は生じません。しかし、横ずれ断層の一部が屈曲していると、そこで横ずれによって地殻が離ればなれになり、正断層をとまなう陥没が生じることがあります。このような陥没で生じる盆地をプルアパート盆地と呼びます（図2）。諏訪盆地は日本では比較的珍しいプルアパート盆地です。藤森（1991）によると、糸魚川―静岡構造線を構成する横ずれ断層が諏訪付近で屈曲しており、その断層が約120～150万年前から千年あたり8～10mの速度で動いたために陥没が生じ、諏訪盆地が形成されました。図1と図2を比較すると、プルアパート盆地は正断層や逆断層で生じる盆地よりも局所的で、かつ四方を山に囲まれた形状になることがわかります。これが周囲を山が取り巻き、閉鎖性が高い諏訪盆地の成因になります。

3 諏訪盆地の低地の地形

閉鎖性と並ぶ諏訪盆地の地形の顕著な特徴は、湖の周囲に非常に平坦な土地が広がっていることです。長野県には平地をとまなう盆地がいくつかあり、県歌「信濃の国」では、松本、伊那、佐久、善光寺（＝長野）の盆地が「四つのたいら」として歌われます。諏訪盆地は、上記の4つの盆地に比べると規模が小さいため、長野県の代表的な盆地とは言えない面があります。しかし、「たいら＝平坦地」という観点では、諏訪盆地は長野県の代表格です。図3は、諏訪盆地と周辺地域の標高の分布を示した段彩図です。諏訪湖の湖面の標高（759m）に対応させて、標高700m台は

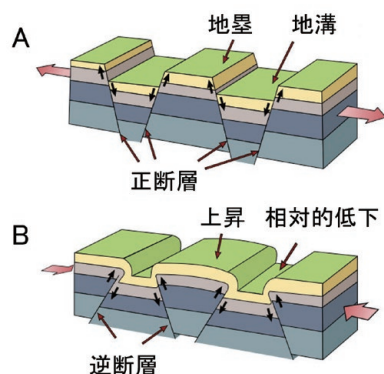


図1：断層活動に起因する典型的な盆地の形成過程。A：正断層に起因する山地と盆地。B：逆断層に起因する山地と盆地。米国地質調査所 (USGS) による図を改変。

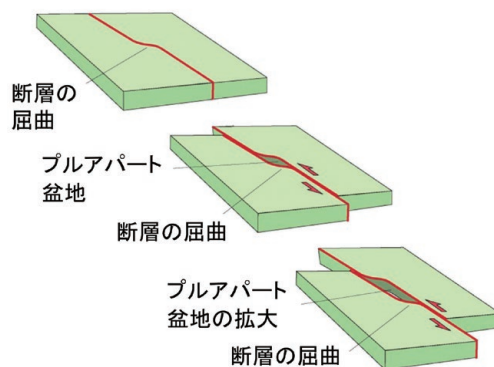


図2：一部が屈曲した横ずれ断層の活動によって生じるプルアパート盆地。SlideServeのWattan Kaiya氏による図を改変。

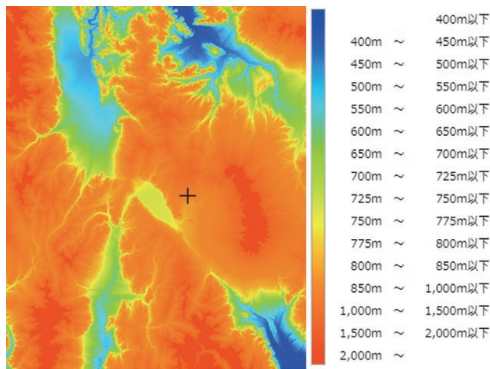


図3: 諏訪盆地と周辺地域における標高の段彩図。地理院地図を用いて作成。

25mごとに細かく色を変えています。また、図に含まれている松本、伊那、上田、甲府の各盆地の低地に概ね対応する標高400～600m台と、標高800～850mの範囲については色を50mごとに変え、他の高度帯はより大ざっぱに色を変えています。図3から、諏訪盆地の低所は色を細かく変えているにも関わらず、標高750～775mを示す黄色系の同色が面的に広がっていることがわかります。一方、他の盆地の低地では、高低差を示す色の変化が、より大きくなっています。

諏訪盆地の底が非常に平坦である理由の一つは、湖の存在です。湖がある盆地では、湖面の標高に対応して周囲で土砂が緩やかに堆積する傾向があります。このような堆積が継続するためには、湖が長期間存在する必要があります。盆地に湖があっても、流出する河川による侵食などにより排水が進み、湖が消滅することがしばしばあります。諏訪盆地は前記のように、地形的な閉鎖性が高いプルアパート盆地のため、湖が長期的に存在しやすい環境にあります。湖が長期的に存在したために、周囲に平坦地が形成された日本の他の例には、琵琶湖と猪苗代湖があります。

一方、湖が存続していても周囲から土砂が多量に供給されなければ、広い低地は形成されません。図4は諏訪湖の集水域と、諏訪湖に流入する主要な河川を示しています。河川の中では八ヶ岳から発する上川と宮川が、最も大規模です。図4から、急峻な火山である八ヶ岳から多量の土砂が供給され、それが河川に運ばれて西麓の広域に堆積し、裾野を作ったことが読み取れます。このような火山に発する河川が山麓に形成した堆積地形は、火山麓扇状地と呼ばれています。火山麓扇状地では、上流から供給された土砂のうち、粒径が大きい礫や粗い砂が主に堆積します。一方、細かい砂や粘土は、河川によってさらに下流に運ばれます。

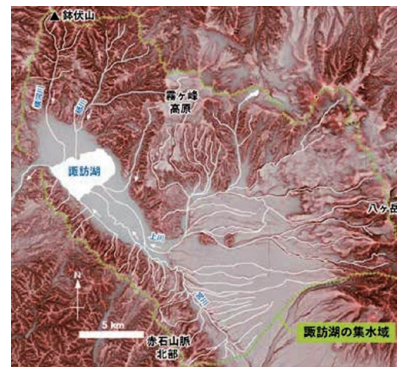


図4: 諏訪湖の集水域の赤色立体地図。葉田野(2021)による。

この種の細粒な物質が堆積したことが、諏訪湖の南東側に広がる平坦地の成因です。さらに、諏訪湖の北北西に位置する鉢伏山に発する横河川や、霧ヶ峰付近から発する砥川などの河川も、土砂の供給と湖岸の低地の形成に一定の貢献をしています。

八ヶ岳の火山麓扇状地ほど顕著な地形ではありませんが、諏訪湖の周辺の平坦地と山地の境には、小規模な扇状地が見られる場所があります。図5は2つの例を示しています。赤線は、霧ヶ峰に発して諏訪市に流入する角間川の扇状地と、その支流で諏訪清陵高校の脇を流れる河川が形成した扇状地の輪郭を、大まかに示したものです。

4 諏訪盆地の自然の多様性と居住

上記のように諏訪盆地には、湖、非常に平坦な低地、山麓部の扇状地、急峻な山地斜面といった多様な地形が分布しています。このような状況は、山地と低地の異なる環境から得られるさまざまな資源を容易に利用できる点で、人の居住と生活に適しています。地理学には谷口集落という概念があります。山地から発する谷の出口が山の産物と低地の産物を交換する場所になり、そこに集落が発達するという考えで、東京都の青梅市や埼玉県の寄居町が典型例とされています。諏訪盆地には谷口に相当する場所が多く（図4）、さらに湖の資源も利用できるという利点があります。

谷口にある扇状地の末端部は、清澄な地下水が湧出しやすい場所です。図5の扇状地の末端付近に位置する清水町は、このような状況を反映した地名で、諏訪清陵高校の名称の由来にもなっています。上水道が普及していない時代には、このような湧水が非常に有用でした。また、諏訪の産業の一つである酒造の主要な



図5:角間川とその支流が形成した扇状地の輪郭(赤線)と、「諏訪五蔵」と呼ばれる酒蔵が位置する場所(黄線)。Google Earth を使用。

蔵(舞姫、麗人、本金、横笛、真澄)も、良質な水を利用するために、角間川の扇状地の末端部である図5の黄色の線に集中しています。米を湖岸の低湿地で作れることも、諏訪の酒造の伝統を支えてきました。

諏訪盆地は縄文時代から多くの人が集まる場所だったことが、考古学の研究により判明しています。2021年にNHKの人気番組「ブラタモリ」で諏訪盆地が取り上げられた際には、「なぜ人々は諏訪を目指すのか?」という副題がつけられ、和田峠で産出する黒曜石の重要性などが紹介されました。上記した利用可能な資源の多様性も、先史時代から人々を惹きつけた一因と思われます。さらに当時の自然環境も重要です。温暖だった縄文中期の6500~6000年前頃には、日本周辺の海面が今よりも2~3m高くなり、今の東京の下町などが水没しました。また、約7300年前には鹿児島市の南方約50kmの海底にある鬼界カルデラが大噴火し、多量の火山灰が東海以西に降り、それが海岸にも堆積して環境が悪化しました。このため、海岸部などに居住していた人々が中部地方の内陸に移住しました。湖面と低平地が広がる諏訪盆地は、海岸部から来た人にとっては故郷に似た場所であり、魅力的に見えたと思われます。

一方、標高が高い諏訪盆地は、冬季には寒冷で厳しい状況になります。それを和らげたと思われるのが温泉の存在です。藤森(1969)は考古発掘に基づき、縄文時代の諏訪で温泉の入浴が行われていたと考えました。温泉は地殻が伸張する場所で生じやすいと指摘されています。諏訪盆地に温泉が多い背景には、プリアパート盆地として地殻が局所的に伸張していることがあります。

非常に平坦な土地が広がる諏訪盆地の底は、災害を受けにくかった可能性もあります。日本では、主に梅

雨や台風にもなう豪雨が、洪水の被害や土砂災害をしばしばもたらします。特に流速が大きな洪水は、家を押し流したり、急速な侵食や堆積による土地の攪乱を生じさせたりします。この種の激しい洪水は、扇状地など、ある程度の勾配を持つ土地で生じます。たとえば甲府盆地では、扇状地を流れる河川が起す洪水の被害が深刻で、戦国時代に武田信玄が信玄堤などを用いた治水を試みました。一方、諏訪湖の周囲のような平坦地では、洪水による広域の湛水は生じやすいものの、流速や水深は小さく、破壊的な洪水は生じにくいといえます。また、盆地では山間で発生した土石流が、山麓の扇状地などに流下することがありますが、平坦地では土石流による災害は生じません。一方、湖岸の平坦地は地盤が脆弱なため、大地震の際には不利といえます。しかし、大地震よりも発生頻度が高い水害や土砂災害に強いことは、地域の持続性の点で重要と思われます。

5 諏訪盆地の自然と文化

上記のように諏訪盆地は、得られる資源の多様性や災害に対する強さなどの点で、恵まれた環境にあったといえます。このような場所では余暇や思索のための時間を得やすく、科学・文化活動が促進されたと仮定できます。一方、山に囲まれた閉鎖的な地形を持ち、内部だけで一通りの資源が得られる場所では、外部との交流が低調になり、視野の広い発展が阻害される可能性もあります。しかし諏訪盆地は、近世以降の日本の中心地である江戸と東京に、比較的近い場所にあります。このために先端的な情報が随時入りやすかったことも、科学や文化の発展の一因と思われます。

諏訪盆地が多くの科学者や文化人を生んできたことが、最近改めて注目されています(小倉、2020)。本稿では、地形などの独特な自然環境が、それに寄与したという仮説を提示しました。

小口高(東京大学)

引用文献

- 小倉美恵子(2020)『諏訪式』(亜紀書房)
 葉田野 希(2021)「諏訪盆地の過去の環境を探る」『みどりのこえ』(長野県環境保全研究所)62、2-3頁
 藤森栄一(1969)『縄文の世界—古代の人と山河』(講談社)
 藤森孝俊(1991)「活断層からみたプリアパートベイズンとしての諏訪盆地の形成」『地理学評論 Ser. A』(日本地理学会)64、665-696頁

諏訪の地理、信州の地理と市民科学

2024年1月20日(土)に諏訪市駅前交流テラスすわっチャオにおいて、公開シンポジウム「諏訪の地理、信州の地理と市民科学」を日本地理学会と共催で行いました。三澤勝衛を一つの源流とすると見られる信州・諏訪の市民科学は、地理、言語、民俗にも広がりをもっています。

小口高さん(東京大学)による「諏訪の地形と文化」、大西拓一郎さん(国立国語研究所)による「言語地理学からみた諏訪」、三上岳彦さん(東京都立大学)・平野淳平さん(帝京大学)・長谷川直子さん(お茶の水女子大学)による「歴史時代の気候変動解明の鍵を握る580年間の諏訪湖御神渡資料」、安室知さん(神奈川大学)による「民俗地図で読む正月観の変遷—年取魚に注目して」、北澤潔さん(長野県上田高等学校前校長)による「信州の教育者 三澤勝衛先生—研究・教育実践から学ぶこと」、以上5本の発表が行われ、発表ごとに質疑応答が持たれるとともに、全員が登壇しての全体討論もありました。会場には約80名の方が参加、オンラインでは100名以上の方が登録され、発表者どうしやフロアならびにオンライン参加者と発表者の間で熱心に議論が交わされ、多くの情報が行き交うことで、有意義な一日を過ごすことができました。

今号のニュースレターには、大西拓一郎さんと小口高さんによる発表をもとにした記事が掲載されています。また、シンポジウムの発表資料や当日のオンライン配信の動画は、市民科学プロジェクトのサイトで閲覧可能です。

2024年度もさらに研究が深められ、シンポジウムなどを通して、成果が公表される予定です。



シンポジウム(2024年1月20日)の様子

展示

ミニ展示「知らなかった！諏訪ことば」

2023年12月26日から2024年1月31日まで、茅野市ハケ岳総合博物館において、ミニ展示「知らなかった！諏訪ことば」が開催されました。上記の1月20日のシンポジウムでも紹介された牛山初男氏の『東西方言の境界』(1969年、信教印刷株式会社刊)と土川正男氏の『言語地理学—日本語の歴史地理学的研究』(1948年、あしかび書房刊)のほかに、『信州茅野の方言カルタ』や『長野県伊那諏訪地方言語地図』の中の方言地図も展示されました。また、「ごしたい」「まえで」などの方言語形とその意味とそれを表す絵が表裏に記された「方言カード」が用意され、自由にさわって遊べるようになっていました。冬休みの時期をはさんだこともあって、帰省中の家族連れの方たちも楽しまれたようです。この「方言カード」は、市民科学プロジェクトのサイトでwebbookとして閲覧できます。ぜひ、お楽しみください。

佐久間精一氏が日本天文学会天文功労賞受賞

茅野市ハケ岳総合博物館に変光星関係資料を寄贈された佐久間精一氏が、長期的な業績「国内の変光星観測者の育成・指導と観測データの収集・一元化、およびその国際化に関する長年の貢献」により、日本天文学会天文功労賞を受賞されました。おめでとうございます。同館には、受賞にも関係する多くの資料が所蔵されています。当プロジェクトでも活用と研究を進めていきたいと思います。



市民科学プロジェクト 市民科学ニュースレター No.4

発行日：2024年3月25日発行

編集・発行：国立国語研究所 制作・印刷：(株)エイブルデザイン

市民科学
プロジェクトHP

